２０２２年度東京藝術大学音楽学部

入学試験問題

出題意図等

作曲科（ピアノ新曲）

・「出題意図等」とは、出題意図あるいは標準的な解答例のことです。

・「出題意図等」についての問い合わせには対応いたしません。

「作曲科ピアノ新曲」　【出題意図】

第４回試験では、「ピアノ新曲」の課題を限られた時間内で予見して演奏するが、本課題では、単一主題による簡略化されたソナタ形式で楽曲が構成されている。

まず、順次上行と倚音を含む主題が提示（1～４小節目）されて、原調のハ短調で半終止する。次の確保では、ペルゴレージやモーツァルトの作品でも見られる転調が行われ、短調の主題が原調に対して長２度下の変ロ短調で現れる（５～６小節目）。続く推移（７～12 小節目の前半）では、主題に含まれる特徴的な動き（3 度下行と２度上行）を用いて、変二長調から変ホ短調、平行調の変ホ長調に転調して、12 小節目の途中で「ドイツの６の和音」による偽終止となる。その後の短い終結部（12 小節目の後半～14 小節目）では、平行調で全終止して提示部が締めくくられ、減七の和音によるエンハーモニック転調を経て、15 小節目から５小節からなる小展開部が始まる。ここでは、主題がホ長調からト短調、ロ短調と３度ずつ上に転調しながら、20 小節目のアフタクトで主題が原調のハ短調に回帰して再現部に入る。最後は主題に含まれる付点８分音符と 16 分音符のリズムを強調して、６の和音の平行進行（23 小節目の４拍目から 24 小節目の２拍目まで）を経て、「ナポリの６」の和音をフェルマータで延ばした後、ff で冒頭の主題を回想して曲が閉じられる。

この課題では、上記を踏まえて以下の６つの点について理解し演奏しているかを確認する。

１）　主題の冒頭の「順次上行」と「複倚音」の２つの要素が曲の至るところで活用されていること。

２）　転調する箇所（特に５小節目、15～17 小節目）で正しく和音を把握していること。

３）　特徴的な和音をフェルマータでしっかり響かせることを想定しているため、「ドイツの６」の和音（12 小節目）と「ナポリの６」の和音（24 小節目）をきちんとすべての構成音を把握して演奏しているかどうかも重要である。

４）　強弱記号について、とりわけ１小節内での強弱の急激な変化（15～16 小節目、20～21 小節目）や、最後の 24 小節目の途中からの ff について確認していること。

５）　*poco allarg.*や *poco string.*の速度記号の指示を確認して、速度に変化が与えられていること。

６）　*23* 小節目の途中から、下声部と内声部が上声部の主旋律に対して *10* 度で平行移動する *3* 声部書法が読み取れていること。